

古墳壁画の保存活用に関する検討会（第7回）議事要旨

1. 日時 平成23年11月9日（水）14:00～16:00

2. 場所 文部科学省東館16階 特別会議室

3. 出席者（委員）

永井座長、有賀副座長、梶谷委員、河上委員、北田委員、木下委員、里中委員、佐野委員、高鳥委員、成瀬委員、銚井委員、三村委員、森川委員

（協力委員）

石川委員、西藤委員、舟久保委員

（事務局）

文化庁：吉田文化庁次長、石野文化財部長、栗原古墳壁画室長、矢野記念物課長、建石古墳壁画対策調査官、内田文化財調査官 ほか関係官

独立行政法人国立文化財機構：

東京文化財研究所 石崎副所長・保存修復科学センター長、川野邊文化遺産国際協力センター長 ほか関係者

奈良文化財研究所 高妻埋蔵文化財センター保存修復科学研究室長 ほか関係者

（その他）

明日香村教育委員会：相原文化財課調整員

4. 概要

（1）開会

（2）委員の交代、事務局の異動者の紹介

（3）議事

①キトラ古墳の整備について

キトラ古墳の整備について、事務局から資料2関係に基づく説明と欠席委員から聴取した意見の紹介が行われた後、以下のとおり意見交換等が行われた。

（欠席委員の意見）

和田委員：B案とC案は、部分的で中途半端な整備になり視覚的に分かりにくいので、古墳の現状をあまり変えないという意味でA案が妥当。ただし、現地に説明板を設けて遺構や墳丘復元図などの発掘調査成果を示すべき。

佐藤委員：国土交通省の公園整備計画との関係を踏まえC案が望ましいと考えるが、古墳を見上げた際に古墳の盛り上がりが見えづらいので、むしろ、上段部分もできるだけ復元した方がよい。また、説明板を用いた古墳の説明や園路の整備などによって壁画だけでなく古墳にも足を運んでもらえるような工夫をすべき。

河上委員：終末遺構の後ろには、必ず、風水思想に基づく三日月状の堀割があるが、整備案ではそれが表現されていないし、古墳の横の林を取らなければキトラ古墳の良さが出てこない。また、状況によっては石室を開けられるようにしておく必要があるし、仮に、見学者に墳丘上を歩かせるのであれば、歩かせるような勾配が必要。

木下委員：C案の断面図の緑色で示された墳丘想定ラインは発掘調査成果に基づくラインか。背面部分を現状より盛り土すると、背面の堀割の様子がうまく表現できない気がする。また、資料2-2の写真は、発掘調査成果に基づく正確な姿ではないようだが、そのことについて説明してほしい。

内田調査官：断面図の緑色で示した墳丘想定ラインは、発掘調査成果に基づいたラインである。発掘調査で判明したあぜ状の断面を参考にすると、北側は断面図のような掘りこみがあったと思われるが、北側は発掘調査をしていないので整備案としては掘りこみの形を緩やかにしている。また、資料2-2の写真は、平成11年3月に刊行された学術調査報告書の写真だが、下段部のように見える部分は古墳の下段部ではなく、その上に

本来の古墳の下段部があったと考えられる。

成瀬委員：被覆に使う植物のコグマザサはベストな選択なのか。墳丘の植物を除去する際に深く掘りこまないと取れないなどの心配はないのか。

佐野委員：高松塚古墳の場合、竹の地下茎が水みちにつながったと思う。ササタケは一旦植えると地下茎が広く深く繁殖するので、コグマザサでよいのかどうか確認が必要。

内田調査官：根自体は深くなく、現状ではベストな選択と考えている。なお、高松塚古墳の場合、樹木が墳丘の割れ目に沿って入り込んでいたが、竹自体は墳丘に影響しなかった。

北田委員：当時の古墳の想定ラインが分かったとしても、約1,300年の時間の経過や歴史を抹消して元の形に戻してしまうのは問題ではないかと考える。

河上委員：墳丘を二段築成として表現しているが、確実に二段目があったと言えるのか。また、段築の平坦部分はきれいに円形に回っているのか。

相原調整員：明日香村教育委員会が実施した平成9年の発掘調査では、墳丘の東側と西側を調査しており、調査の結果、少なくとも墳丘は二段になっていたと考えられる。また、段築のテラス部分は東、北、西に回っていることが確認されている。

河上委員：キトラ古墳は本来もう少し大きかったのではないかと考えており、今の状況で復元してよいのか気になる。仮に、復元する場合、墳丘の表面の凸凹に土を入れなければならないので、復元は非常に難しいと思う。また、復元案の図にある墳丘の高さは高すぎる気がする。東側の現墳丘ラインが復元ラインより上になっている部分があるが、掘ってみて調査をすれば墳丘の表面が出るかもしれない。

西藤委員：C案の場合、遊歩道から墳丘を見上げた際に人工的に盛った土だけを眺める形になるので墳丘が見えないと思う。できるだけ復元しない案がよいと思う。

河上委員：終末遺構のこの時期の古墳のほとんどが十尺を使っている可能性が高いので、十尺の整数である四十尺、五十尺、百尺を使って考えなければならないと思う。

森川委員：歴史的な資産は守りつつ、できるだけ見えやすく、分かりやすく、体感しやすい整備を行ってほしい。整備案の中ではC案が分かりやすいと思うが、むしろ、復元に近い案が可能であれば、来園者に明日香の地を身近に感じてもらえると思う。

佐野委員：イギリス、アイルランド、韓国などの諸外国の遺構に比べ、日本の遺構は表現力が弱いと思う。どの案を採用するにしても表現力を出せるよう整備することが重要で、多くの人が見に行きたいと思える魅力的な場所にすることが必要。

木下委員：キトラ古墳の風水思想に基づいた造墓思想を重視すべき。整備案の中ではC案に考えが近いが、発掘成果に基づいて確認できたことは復元的に示して、全体の形状を損なうことがなければ、段築部分は復元した方がよいと思う。石室の床面は段築の床より低いのか確認したい。

内田調査官：キトラ古墳の石室の底面は段築より低いと考えられる。ちなみに、高松塚古墳の場合も同じで、段築より少し下に石室の床面があったと考えられる。

舟久保委員：どの案で整備するにしても、解説板を設置して古墳の本来の姿や発掘調査の成果などを解説することが重要。不確かなものがある中で復元整備ができないということであれば、今得られている知見から絵や模型を製作し、体験学習館に設けることも考えられる。また、墳丘の勾配については、墳丘の上を歩かせるか、柵を設けるかなど考慮した上での判断が必要。

成瀬委員：文化庁ほか関係の方々の意見が概ね一致しているのであれば、積極的な復元をしてもよいと思うが、そうでない状況であれば、現状に近いところで抑えておくほうがよいと思う。その代わり、説明を充実することによって、なるべく現地に足を運んでもらうという考え方がよいと思う。

北田委員：成瀬委員の意見が最もよいのではないかと考える。

永井座長：墳丘遺構を保護した上で復旧を基本として検討するという基本的な姿勢に戻る必要があると思うが、復旧をベースにした上で、どこまで手を加えることが許されるか、あるいは、更に調査の必要のある部分をどう扱うかなども含め現実的な案を考える必要

がある。

栗原古墳壁画室長：本日の意見を踏まえ、座長と相談させていただき、次回具体的な整備案を提示したい。

②キトラ古墳壁画の保存・活用について

キトラ古墳壁画の保存・活用について、事務局から資料3に基づく説明と欠席委員から聴取した意見の紹介が行われた後、以下のとおり意見交換等が行われた。

(欠席委員の意見)

和田委員：来館者が多方向から身近に見学できるB[〃]案がよい。複数の角度から見学できるよう、壁に沿うように壁画をコの字形に配置した方がよい。ちなみに、C案とA+C案は、来館者の動線、人数制限、監視員の配置などの運用面で難しいと考える。

三浦委員：A案の展示室は見学時以外は使わないので、限られた施設を有効利用できず、ガラス面が広く温湿度の安定化が困難である。また、C案とA+C案は見学者がガラス面と展示ケース前で滞留する可能性があるのもうまく誘導できない恐れがある。B案又はB[〃]案が安全面からも望ましいが、B[〃]案を採用する場合、上から壁画を覗き込む点と壁画の出し入れ作業が必要になる点を考えると、公開時の安全性を担保する必要がある。

佐藤委員：B[〃]案が適当と考える。展示室退室時に、パネル等を用いて古墳にも足を運んでもらえるような導線を工夫してほしい。

成瀬委員：温湿度環境についてお伺いしたい。

栗原古墳壁画室長：温湿度については「文化財公開施設の計画に関する指針」の考えに基づき、適切な環境を保つことを前提に考えている。

永井座長：入場、人員制限を設けると理解してよいか。

栗原古墳壁画室長：そのとおり。

梶谷委員：B[〃]案は一見よさそうに見えるが、気流の動きなどのデータをとる必要がある。

A+C案は移動のリスクはあるものの、博物館でも行っている方法なので、環境面の安定性はある程度保障されていると思う。

河上委員：温湿度環境については文化庁が責任を持つと思うが、体験学習館のセキュリティなどについては文化庁が責任を持ってないと思うので、国土交通省と連携して実施してほしい。

栗原古墳壁画室長：国土交通省と十分連携してしっかり対処したい。

銚井委員：A案以外は、壁画保管室が直接外壁に面しており、万一、空調が止まったときの壁画への影響が懸念されるので、空調に変動のない設計をする方が望ましい。また、諸室の使い方によっては、保管室全体に影響を与える場合もあるので、諸室の使い方を明示してほしい。

成瀬委員：収蔵庫と展示室の間に温度勾配を設けるかどうかによって、ガラスの面積などの論点が出てくると思うので、最初に温湿度環境について決めた後、展示の方法を議論した方がよい。

高鳥委員：温湿度を一定に保つことを前提にしていると思うが、展示室に出入口がある場合、温湿度が一定になるかどうか分からないので、展示室に壁画は置かず、安全面からも保管室に置いたまま公開する方が望ましい。

河上委員：キトラ古墳の場合は、漆喰だけ取り外したので、壁画に傾斜を持たせたり、壁画を組み合わせて展示することも可能だと思う。その意味で、壁画保管室を大きく確保する必要はなく、壁画展示室という考え方が望ましい。

建石調査官：この壁画保管室は、高松塚古墳壁画の修理施設のように、通常の保管に加え定期的にメンテナンスをする場所になると考えている。

佐野委員：壁画を大事に保管している姿を見てもらうことに意味があると思うので、考え方としては、壁画保管室でよいと思う。間近に見学できるB案やB[〃]案がよいと思うが、B[〃]案の張り出している部分のガラスの高さはどの程度を想定しているのか。また、保管室から張り出している部分は保管室と空間が繋がっているのか。

建石調査官：ガラスの高さについては、当然低い方が見やすいが、壁画の安全面を考慮して、どの程度の高さが適当なのか今後検討していきたい。また、保管室から張り出している部分は保管室と空間が繋がっている。

里中委員：壁画を大切に保管している姿を一般公開等の形で定期的に報告し、その代りに復元物を置いておくのがよいと思う。古墳はなるべく手を加えず、当時の人の価値観を実感できるよう、近くに再現物を作ってみてはどうか。本来の形に近いものがあると人は魅了されるので、諸外国も復元している例が多いが、すべて発掘されておらず、研究も進展していない状況で手を加えるのは疑問が残る。

木下委員：A案のパースを見ると壁画が前方にあって、平面図を見ると後方にあるように見えるが、どのような展示を考えているのか。

建石調査官：平面図の後方は、メンテナンスの際に必要なに応じて壁画を隠すことができるよう配慮したスペースとして考えている。

森川委員：建物の中であれば、壁画を守り、修理、整備することが可能だが、フィールドは、何らかの形を作り上げて見てもらい体感してもらおう場所なので、両者は基本的に違うと思う。建物の中は収蔵庫であってはいけないと思うが、修理の姿を見てもらうことも大事だと思うので、様々な手法を検討いただきたい。また、復旧か復元かという議論は、どこに時間軸を置くかという違いなので、必ずしも復旧にこだわる必要はないと思う。

永井座長：今回は、管理システム、公開期間、温湿度管理を含む環境制御などを提示しながら再度ご意見を頂戴したいと思う。

③第8回国宝高松塚古墳壁画修理作業室の一般公開について

第8回国宝高松塚古墳壁画修理作業室の一般公開の結果について、参考配布資料に基づき報告が行われた。

④その他

史跡造山古墳第五古墳(千足古墳)の保存対策の経過について事務局から報告が行われた。

(4) その他

事務局より、次回の日程等について連絡があった。

(5) 閉会

以上